

スターリン体制下の教会と国家

——府主教セルギーの「融和」政策をめぐって——

廣 岡 正 久

はじめに

- 一 ロシア革命と正教会
- 二 セルギー・ストラゴロドスキー
- 三 国家への「忠誠宣言」
- 四 スターリンと府主教セルギー
むすびにかえて

はじめに

二〇〇五年五月から六月にかけて「ロシア正教会 (Русская православная церковь)」モスクワ総主教庁は、「在外ロシア正教会 (Русская православная церковь за границей)」との間で、ロシア革命直後の一九二〇年代初頭からほぼ八〇年間にわたって続いてきた対立関係に終止符を打つことについて歴史的合意に達した。二〇〇六年末までにすべての基本的文書、とくに教会法上の関係についての取り決めが双方で交わされ、二〇〇七年の復活祭後に最初の合同の奉神礼が執り行われることが決定された。⁽¹⁾

在外ロシア正教会の存在とその執拗な挑戦は、ソヴィエト体制崩壊後のロシアで「事実上の国教会」の地位を占め、精神的な威信と政治的、社会的影響力を高めつつあるロシア正教会にとって、いわば喉元に突き刺さった「棘」のように、苛立たせ、苦しみ続けてきた問題であった。というのも、この亡命ロシア人の教会はポリシェヴィキ革命とともに祖国を離れて以来、一貫してモスクワ総主教教会の教会法上の合法性と正統性に異議を申し立ててきたからである。今回粘り強い話し合いと交渉の末に、和解が成立し、ロシア正教会はこの難題から解放されることになったのである。

両教会間の最も深刻な対立点は、ロシア正教会の国家に対する姿勢、とりわけマルクス・レーニン主義の「戦闘的無神論」イデオロギーの下で苛烈かつ無慈悲に宗教に弾圧を加えたソヴィエト共産主義国家との関係をめぐってであった。反ポリシェヴィキの旗幟を鮮明にし、妥協的なロシア正教モスクワ総主教教会と袂を別った在外ロシア正教会の立場に立てば、ソヴィエト体制に対しては譲歩はおろか、いかなる和解も融和も容認されるべきではなかった。他方モスクワ総主教教会からすれば、教会組織の存続を図るためにも、例え不本意ではあっても、譲歩あるいは妥協するという選択肢が認められるべきであった。

二つの教会の対立は、一九二七年、『モスクワおよび全ルーシの総主教』チーホン (Патр. Тихон Белявин, 1865~1925) の死後空位となった総主教座を臨時代理として継承し、教会首長の任にあった『ニジェゴードの府主教』セルギー (Митр. Сергий Спиродольский, 1867~1944) がいわゆる国家への「忠誠宣言」(Декларация лояльности)⁽³⁾に署名し、公表して以後、歩み寄りの余地を一切許さない、決定的な対立の関係に発展した。『キエフとハリコフの府主教』アントニー (Митр. Антоний Храповицкий, 1864~1936) と、彼によって昇叙され、その後継者として在外ロシア正教会の首長 (一九三八~六四) となった府主教アナスタシー (Митр. Анастасий Грибановский, 1873~1965) に従ってこの教会に加わった亡命ロシア人は、共産主義者とキリスト教徒との間のいかなる妥協をも容認しなかった。彼らは冷戦時代

の一九五一年以降本拠をニューヨークに移し、二〇〇五年に和解の合意が成立するまで自らが唯一の正統なロシア正教会であると主張し続けたのであった。

その後この亡命教会は、これまでのように異国からではなく、ロシア国内を主戦場として公然とモスクワ総主教教会に戦いを挑むようになる。ソヴィエト体制崩壊が目前に迫ったゴルバチョフ政権時代の一九九〇年三月、在外ロシア正教会は「自由正教会 (Свободная Православная Церковь)」を名乗って、祖国ロシアに復帰して教区を開く方針を明らかにし、自派の聖職者を相次いで叙任するとともに、モスクワ総主教教会を離脱する意思を表明した聖職者を受け入れ始めたのである。

在外ロシア正教会は、モスクワ総主教教会に対して、総主教自らがセルギー府主教の「忠誠宣言」をはじめとして教会とソヴィエト体制との「癒着」や「協力」について公式に自己批判し、謝罪すべきであると主張した。またこの教会によれば、スターリン政権下の一九四三年に行われたセルギー総主教の叙任という高位聖職者の任免に対して、世俗権力の介入を許したことの教会法上の非合法性も問題とされなければならない。合法性と正統性が認められないモスクワ総主教とその監督下で執り行われる教会機密（秘跡）は「主の祝福を欠く (безблагословенный)」ものである。さらに、大ロシア主義的な正統主義を信奉するこの教会は、キリスト教会再統一を目指す一切のエキューメニカル運動にも反対した。

だが他方モスクワ総主教教会からすれば、その管轄下に入ることを拒否する在外ロシア正教会は教会法上、非合法的な「セクト」に過ぎず、その存在を容認することはできなかった。しかしそれにもかかわらず、『モスクワおよび全ロシアの総主教』アレクシー二世 (Патр. Алексей II Ридигер, 1929~) は、在外ロシア正教会と話し合うチャンスを探索し続けた。一九九一年一〇月一七日付けの公開状で、彼は在外ロシア正教会に完全な「自治権 (автономия)」を保証し、

モスクワ総主教教会が西欧諸国で保持している管轄権を放棄して譲渡するという条件を提示して、モスクワ総主教監督下での再統合を呼び掛けた。さらに一九九二年二月、モスクワ総主教教会に属する三〇人の聖職者たちが話し合い応じるように求める書簡を送った。しかし、こうした一連の動きは在外ロシア正教会の側にかえってより強い反発を招いたのであった。⁽⁴⁾

彼らが一貫して主張したのは、モスクワ総主教教会が教会法上合法、かつ正統的な地位を回復するためには、過去の過ちを認め、反省の意を公にしなければならないということであった。セルギー総主教代理のソヴィエト国家への融和と迎合的な行為が教会の存続をはかるために取られた苦衷の選択であり、もはや歴史的過去の問題であるというアレクシー総主教の弁明を、彼らはセルギー宣言の否認とは認めなかった。在外ロシア正教会の指導者の一人、ゲオルギー・グラッペ主教の言葉は、この教会の妥協を許さない厳しい姿勢を端的に物語るものである。彼はいう。「一九二七年宣言が歴史の一部であるというのなら、総主教は正しい。……歴史には殉教者や、懺悔者の偉業もある。だが、ユダの裏切りも含まれているのだ」と。⁽⁵⁾

このように、二〇世紀のロシア正教会が迎った悲劇的な歴史において、セルギー総主教代理という教会指導者の存在と、彼が好むと好まざるとにかかわらず選択せざるを得なかった一連の行為は、とりわけ国家と教会との関係をめぐって長い間深刻な対立を引き起こしてきたし、またソヴィエト体制崩壊後においてもそうであったのである。

本研究の目的は、総主教代理セルギー府主教の「忠誠宣言」が象徴的に物語っている国家との関係における彼の教会指導の軌跡を辿るとともに、ディミートリー・ポスピエロフスキーによって初めて紹介された、スターリンと府主教セルギーをはじめとする教会首脳との会見における生々しい遣り取りについての、当時のソヴィエト政府で宗教問題を担当していたゲオルギー・カルポフ KGB（当時は NKVD）少将（一八九八―一九六七）が書き残した記録を参考にし

ながら、⁽⁶⁾ スターリン体制下の国家とロシア正教会との関係について検証することである。

註

- (1) Церковный Вестник (Издателский Совет Русской Православной Церкви), No. 24 (349) декабрь 2006, c. 4.
- (2) 拙稿「ロシアにおける信教の自由——宗教法の改正をめぐる」(二)『産大法学』(京都産業大学法学会、平成一二年二月)、第三三巻第三・四号、二五六～二五八ページを参照。
- (3) Акты Святейшего Патриарха Тихона и позднейшие документы о преемстве высшей церковной власти 1917–1943, Сост. М.Губонин (Москва, 1994), c. 509–513.
- (4) ソヴェト体制崩壊後のロシア正教会と在外ロシア正教会との対立については拙稿「民族主義路線に回帰するロシア正教会——自由のジレンマとアイデンティティ危機」『ロシア研究——特集ロシアのアイデンティティを求めて』(日本国際問題研究所、一九九五年一〇月)、第二一号、一〇四～一〇七ページを参照。
- (5) Православная Русь (Москва, 1991), no. 17, 1991, c. 6.
- (6) Dimitry Respirovsky, “The ‘Best Years’ of Stalin’s Church Policy (1942–1948) in the Light of Archival Documents”, Religion, State & Society (Keston Institute, Oxford, 1997), Vol.25 No.2, pp. 139–162. なお、カルボンの記録のロシア語原典については、Г. П. Мурашко и М. И. Одинцев, изд., Власть и церковь в СССР и странах Восточной Европы 1939–1958: дискуссионные аспекты (Москва, Российская Академия Наук Институт Славяноведения, 2003) 所収の“Записка полковника государственной безопасности Г. Г. Карпова о приеме И. В. Сталиным иерархов Русской Православной Церкви, c. 256–264. を参照”。

一 ロシア革命と正教会

一九一七年にロシアを襲った二つの革命は、当時のロシアの宗教界、とりわけロシア正教会に対して相反する二つの影響を及ぼした。

第一に、三〇〇年にわたったロマノフ家の帝政の崩壊をもたらした、いわゆる二月革命は、ピョートル大帝時代〔一六七二～一七二五〕の一七二一年以来、総主教制の廃止によって剥奪されていた国家に対する教会の独立権と自立性の回復を可能にし、総主教制の復活を約束した。革命の騒擾の最中に長年の悲願であった宗教会議、すなわち地方公会（поместный собор）が開催され、ロシア正教会第二十一代総主教チーホン〔在位一九一七～二五〕が選出された。⁷⁾

しかしながら他方で、同年に起こったボリシェヴィキのクーデタによる第二の革命は、チーホン総主教の登場によって復権を約束されたはずのロシア正教会に深刻な脅威とダメージを与えることになる。マルクス・レーニン主義が掲げる「戦闘的無神論」イデオロギーに導かれたソヴィエト政権は、宗教そのものの根絶を目指して苛烈で徹底的な反宗教闘争を展開した。その迫害は単にソヴィエト権力を通じて聖職者や教会組織に物理的暴力が加えられただけでなく、ソヴィエト共産党を通して人々の意識や心理から宗教心や宗教感情を一掃するイデオロギー闘争の形を取っても企てられた。⁸⁾

だがロシア正教会を危機に陥れたのは、ボリシェヴィキ政権による弾圧だけではなかった。それに加えて、革命後にあらわとなった教会内部の左派革新派の反総主教グループの台頭が指摘されなければならない。チーホン総主教の体制に不満をもつ妻帯の教区司祭を主力として、『ナルヴァの主教』アントニン（Еп. Антонин Грановский, 1865~1927）らごく少数の主教も加わって、彼らはソヴィエト政府の支援を受けて、いわゆる「生ける教会」Живая Церковь（革新教会 Обновлѣнчество）を結成した。これら親ソ的革新派の聖職者たちは、チーホン総主教をはじめとする教会首脳部の逮捕、収監によって生じた間隙を衝いて、教会指導の全権を掌握しようと企てた。他方ボリシェヴィキ政権は、ロシア正教会の内部分裂の公然化という絶好の機会に乗じて、革新派にさまざまな支援——資金援助や教会施設の使用許可——を与え、内部対立を激化させることによって、聖職位階制の破壊と総主教制の廃止を企図した。ボリシェヴィキ政

権が新たに開始した宗教弾圧はこのように、ロシア正教会に対して内外の両面から攻撃を加え、その組織破壊に一定の成果を収めたのである。

ソヴェエト体制下の宗教問題について優れた著作を公刊したポール・アンダーソンは、「生ける教会」についてこう書いている。

生ける教会派はその影響力と組織を拡げること成功した。というのも、ソ連の大都市のほとんどに、さらに大都市にも彼らが推薦する者を主教に、首席司祭に、そして教区司祭に叙任する支持を政府から得たからである。ソヴェエト当局は、生ける教会の分離を受け入れることを拒否した聖職者を北方やシベリアに移動させあるいは流刑に処すことで支援を与えた。聖堂や大教会を手に入れた生ける教会は、一九二五年には一二、五九三の教区、一六、五四〇名の僧侶、そして一九二名の主教を擁すると主張した。これは当時の教区と僧侶の総数の半分以上、正教会がかつて有していた主教教を上回る数を意味していたのだ。⁽⁹⁾

こうしたことに加えて、ロシア正教会はさらに、チーホン総主教のポリシェヴィキ政権に対する姿勢を批判し、より強硬な態度を取るべきであると主張する右翼グループからの挑戦にもさらされることになる。革命後のロシア全域で戦われた内戦で反ポリシェヴィキ派の白衛軍を支持し、後に敗れてヨーロッパに亡命したロシア人主教たちは最初コンスタンチノーブル（イスタンブール）で、その後の一九二一年にはベオグラード近郊のスレムスキー・カルロフツィで宗教会議を開き、「在外シノド（Синод за границей）」すなわち「在外ロシア正教会（Русская православная церковь за границей）」を設立した。この会議にはロシア、ウクライナそしてヨーロッパ各地から『キエフとハリコフの府主教』

アントニー、『ヴォルニニヤの府主教』エヴロギー（Мирп. Евлогий Георгиевский, 1868-1946）⁹ として『キシネフの大主教』アナスタシー（Арх. Анастасий Грибановский, 1873-1965）らを含む一二名の主教と、司祭と信徒の代表者八〇名が出席した。強硬な反革命派の府主教アントニーが議長を務めたこの会議で、少数の反対があったとはいえ、ポリシェヴィキ政権の正統性を否定し、帝政の復活を訴える決議を採択した。¹⁰

こうした復古主義を唱えるロシア正教会の右翼グループからの批判が、チャーホン総主教が率いるロシア国内の正教会をさらに苦境に陥れることとなった。一九二三年、チャーホンは公式にカルロフツィ派と袂を別ち、彼らにその教会を閉鎖するように命じた。このチャーホンの声明は亡命ロシア人教会の聖職者の間に対立を引き起こした。府主教エヴロギーはチャーホンの決定を受け入れたが、府主教アントニーはチャーホンを公然と弾劾し、いわゆる「カルロフツィ・シノド」、あるいは「在外シノド」と呼ばれるグループの首長の地位にとどまった。反ポリシェヴィキで、復古主義的なロシア・ナショナリズムに与した亡命ロシア人はアントニー府主教を支持した。¹¹

一九二五年四月チャーホン総主教が死去すると、ポリシェヴィキ政権の厳しい監視下に置かれていた高位聖職者たちは「通信による投票」という方法で新総主教を選出しようと企てた。彼らは修道士タブリオン（Монах Табрион, 1898-1978）と親子二人の平信徒とから成るメッセンジャーを各地の主教の許に派遣した。しかし、彼らの企ては露頭し、投票権を有する高位聖職者の名簿を入手したソヴィエト当局は、彼らの多くを逮捕、収監し投票を不可能とするこ
とによって、総主教制の存続を阻止しようとした。その結果、一九二七年までに一六〇名の主教のうち実に一一七名が逮捕されるにいたった。¹²

こうした困難な状況にあっても、ロシア正教会は総主教制を維持し、教会の自主独立権を守り抜こうと努力を重ねていた。生前チャーホンは万一の場合を想定して、自らの意思で三人の臨時総主教代理を指名した。だが、すでに彼らは獄

中にあった。チーホンが指名した三人の代理の一人、『クルチツの府主教』ピョートル (Мир. Петр Подьянский, 1862~1937、銃殺刑) も、不測の事態に備えてさらに彼ら三人の後継者として三人の高位聖職者を代理に任命していた。この三人のうちの一人が、他ならぬ府主教セルギーであった。

註

- (7) チーホン総主教を選出した一九一七年〜一九一八年の地方公会については、拙著『ロシア正教の千年——聖と俗のはざま——』、日本放送出版協会、一九九三年、一二七〜一五七ページおよび拙論『二〇世紀のロシア正教会——チーホンからアレクシー二世へ』、『スラブ・ユーラシアの変動——その社会・文化的諸相』、北海道大学スラブ研究センター、一九九七年、一二一〜一二六ページを参照。
- (8) ポリシェヴィキ政権の宗教弾圧政策については、拙著『ソヴィエト政治と宗教——呪縛された社会主義』一九八八年、未来社、五八〜八五ページを参照。
- (9) Paul Anderson, *People, Church and State in Modern Russia* (New York, 1944), pp. 81-82
- (10) この会議には『オデッサの府主教』後の『北アメリカの府主教』プラトン (Мир. Платон Рождественский, 1866~1934)、『ボルタヴァの大主教』フェオフアン (Арх. Феодан Быстров, 1873~1943)、『セヴァストポリの主教』ヴェニアミン (Мир. Вениамин Федченков, 1880~1961)、『長司祭シァヴェリスキー (Протопр. Шавельский, 1871~1951) など白衛軍の支持者、貴族、旧軍人や官吏が参加した。少なくとも一九九人の将軍、多数の公 (князь) が加わったし、その中には第三、第四国会の代議員で悪名高い王政復古主義者の N. E. マルコフ (Н. Е. Марков, 1866~1945) が含まれていた。John Curtis, *The Russian Church and the Soviet State, 1917~1950* (Boston, 1953), pp. 108~113.
- (11) Nicolas Zernov, *The Russians and Their Church* (London, 1968), pp. 171~173.
- (12) 逮捕された修道士タブリオンは、その後の二七年間を収容所と流刑地で過したことになる。Dmitry Pospelovsky, *Soviet Anti-Religious Campaigns and Persecutions*, vol. 2 of *A History of Soviet Atheism in Theory and Practice, and Believers* (Macmillan Press, 1988), p. 59.

ニ セルギー・ストラゴロドスキー

ロシア正教会第一二代総主教セルギー（俗名イヴァン・ニコラエヴィチ・ストラゴロドスキー、Мран Н. Страновский）は、一八六七年、モスクワ東方四〇〇キロメートルに位置するアルザマス市で呱呱の声を挙げた。彼の家系は数世代にわたって有力な聖職者を輩出していた。曾祖父は主教に任ぜられ、一七六八年に『モスクワの副主教』に任ぜられた。祖父は教区を預かる長司祭、父はアルザマスにあるアレクシー女子修道院付きの長司祭であった。イヴァンの家族は、教会と修道院の都市である——一八九〇年当時人口一万二千人の都市に三〇の教会、四つの男子修道院、三つの女子修道院が存在した——アルザマス市で敬虔な、そして教育熱心な一家としてよく知られていた。イヴァンは誕生して間もない時に肺病で母を失うという不幸を経験する。彼は姉とともに修道院で司祭の父と祖母の手で育てられることとなった。⁽¹³⁾

イヴァンはすでに少年時代から「白僧（белоризец、妻帯の教区司祭）」ではなく、「黒僧（черноризец）」、すなわち高位聖職者である主教に昇任することが期待される修道司祭の道を選ぶことを決心していた。彼は八歳で教区付属小学校に入学し、その後アルザマス教会学校に移った。さらにニジェゴロド神学校に進み、一八八六年優等で卒業した。これは当時の教養ある聖職者の子弟によく見られたコースであった。神とその教会に全生涯を捧げることを決意していたイヴァン青年は、神学校卒業と同時にサンクト・ペテルブルク神学大学歴史学部に進学した。

一八九〇年一月、彼は剪髪式を受け、ラドガ湖の畔にある有名なヴァルラム修道院の創設者聖セルギーの名を得て修道士セルギーとなり、直後に輔祭職を経て司祭に昇叙された。同年修道司祭セルギーは、論文「信仰と善行に関する正教の教義」を提出し、優等の成績で卒業した。彼は神学大学学長に日本で宣教活動に従事することを申し出て、一〇月東京に赴任した。当時、日本では大主教ニコライ（Арх. Николай Касаркин, 1836~1912、後に列聖）が活発な宣教活

動を展開し、日本にキリスト教信仰を根づかせようと努力しつつあった。青年司祭セルギーは、偉大な宣教師ニコライを補佐する役割を買って出たのである。⁽¹⁴⁾

一八九一年一月、セルギーは京都の教会に派遣され、同時に東京の神学校で教理神学を講じた。二年後の一八九三年、彼は帰国を命じられ、サンクト・ペテルブルク神学大学で旧約聖書学担当の講師に任命された。その後ギリシアのアテネに置かれたロシア大使館付きの首席司祭に赴任し、修道司祭の最高の位階である掌院(архимандрит)に昇叙された。一八九五年神学大学から博士学位を授与されると、再度日本に派遣され、ニコライ大主教の下で宣教活動に従事した。⁽¹⁵⁾

一八九九年、掌院セルギーはサンクト・ペテルブルク神学大学学長補佐として帰国を命じられ、二年後の一九〇一年に三四歳の若さで学長に就任するとともに、主教に叙任された。同年、彼の名前はサンクト・ペテルブルクの知識人の間で広く知られるようになる。セルギー主教は当時結成された、いわゆる「求神主義運動(Бого-Искательство)」の中心となった「宗教・哲学集会(Религиозно-Философские Собрания)」の議長に任命された。⁽¹⁶⁾ このよく知られた集会は、著名な作家ディミートリー・メレシコフスキー(一八六五―一九四二)とその妻で詩人のジナイダ・ギッピウス(一八六九―一九四五)が発起人となって設立され、宗教信仰をめぐる分裂に陥った知識人たちが、「文化的深淵」を架橋しようとしてほぼ二年間にわたってロシア正教会の代表者と公開討論を行う場となった。この集会に参加した知識人の中には哲学者のニコライ・ベルジャエフ(一八七四―一九四八)やウラジミール・ソロヴィヨフ(一八五三―一九〇〇)がいたし、また元マルクス主義者で経済学者のセルギー・ブルガーコフ(一八七一―一九四四)や、その友人で、「二〇世紀ロシアのレオナルド・ダヴィンチ」とも称されたパーヴェル・フロレンスキー(一八八二―一九三六、銃殺による処刑)⁽¹⁷⁾のように、教会のうちに霊的な抛り所を再発見して、ロシア正教会の聖職者の途に進んだ知識人も現れた。

主教という高位聖職者の地位にあったとはいえ、三〇歳代前半の若いセルギーはこの集会に参加した聖職者の中では最も急進的な改革派の立場に立ち、良心の自由と教会の国家からの分離の原則を主張していた。彼は二〇回を越える集会で議長を務めたが、多くの参加者から高い評価と尊敬を集めた。最終回の集会では参加者たちが立ち上がり、温かい賞賛の言葉をセルギーに送ったという。「指導者の精神が会衆に支持され、集会の幸運な、全く予期しない成功を決定づけたのだ。……われわれは誤解、苛立ち、そして食い違いしか期待していなかったのに。……われわれが目当たりにしたのは高位聖職者でも、議長でもなく、一人のキリスト教徒であった。……だから真剣な思想の遣り取りにこれ以上ないよい雰囲気が生まれたのだ」と。⁽¹⁸⁾

「宗教・哲学集会」はそれ自体が直ちに豊かな精神的、文化的結実をもたらしたわけではなかったが、革命という大破局の予兆に脅えながら、頹廃と混乱の様相を深めていた帝政末期にあつて危機の超克に取り組もうとしていたロシア知識人を教会の懷に呼び戻す上で無視することのできない役割を演じたといえよう。ヴァシリ・ローザノフ（一八五六―一九一九）やベルジャーエフは、そうした精神的回心を遂げた知識人であった。

一九〇五年、セルギー主教は『フィンランドとヴィボルグの大主教』に叙任された。さらに一九一一年には教会の實質的な最高意思決定機関である聖宗務会議（Святейший Синод）のメンバーに加えられた。翌一九一二年彼は、長く二世紀間にわたってその再開が待望されていたが、結局五年後の帝政の崩壊後に開催されることになる地方公会の準備会議の議長に就任した。

一九一七年三月、ロマノフ王朝が歴史の舞台から消え去り、臨時政府が、次いでボリシェヴィキ政府が誕生するといふ変動ただならぬ状況下で、同年八月待望久しい地方公会が開催された。この会議の最重要議題は、正式のロシア正教会首長として新しい総主教を「選挙」で選任することであった。大主教セルギーは会議を組織した中心的指導者の一人

であつたにも拘わらず、彼に投じられたのは三〇九票中の四票に過ぎなかつた。多数の支持票を獲得したのは『モスクワの府主教』チーホンであつた。セルギーは期待していた『ペトログラードの府主教』にも選ばれることなく終わった。⁽¹⁹⁾過激な「戦闘的無神論」を標榜するボリシェヴィキ政権の出現に結果した一連の革命は、それまで二世紀間にわたつて帝国の支配下に置かれていたロシア正教会に、ほんの束の間であつたとはいえ、ひと先ず信仰の自由を容認するという皮肉な事態を生み出したのであつた。ボリシェヴィキが勝利を収めたクーデタ直後の二度の中断を挟みながら続けられた地方公会は、チーホン総主教の選出という成果を収めただけでなく、高位聖職者を選挙によって叙任するという改革にも成功したからである。

しかしながら、教会が手に入れた幸運も長続きしなかつた。翌一九一八年九月、地方公会はボリシェヴィキ政権の命令によつて閉会を余儀なくされた。その後の数年間、『ウラジミールの府主教』の地位にあつたセルギーの動静は必しも明らかではない。恐らく彼は、持ち前の優れた調整能力を駆使して、ソヴィエト当局と粘り強く交渉に当たつていたと考えられている。もつともセルギーが当時、ボリシェヴィキが掲げる無神論イデオロギーの真意と意図を見抜き、正確に理解していたか否かについては疑問がある。マルクス・レーニン主義イデオロギーが、教会、その財産、そして信徒たちに向けて発動された際の剥き出しの敵意と徹底的な無慈悲さを、彼が認識していなかつたのはほぼ確実である。実際、府主教セルギーは、地方ソヴィエト当局が教会資産を収奪すれば、彼らの要求は満たされるのであり、それ以後は信徒たちに地方ソヴィエト当局に反抗せず、協力するように呼び掛けてさえた。政治的現実に対する教会指導者としての彼の判断力の欠如ないし曖昧さが、後年の彼の悲劇的運命を招き寄せ、また教会を困難な状況に導いたといえよう。セルゲイ・フィルソフはこうした点に触れてセルギーの無能を厳しく批判している。「彼は「戦術的」成功に結びつかず、しばしば犠牲が多くて引き合わないピラス王の勝利となる「戦術的」勝利を勝ち取ることに汲々とするの

が常であった」と。⁽²⁰⁾

府主教セルギーがポリシェヴィキ政権の反宗教政策の真意を理解していなかったという事実は、一九二二年ポリシェヴィキ政権の支持と援助を受けて誕生した反チャーホン総主教グループ、いわゆる「生ける教会」に対して彼が示した態度からも窺うことができる。驚くべきことに、当初彼はこの分派に与したのであった。恐らくセルギーは、同年に行われたチャーホン総主教の逮捕、収監が長引き、さらに一九二二年夏に『ペトログラードの府主教』ヴェニアミン (Митр. Вениамин Казанский, 1874-1922^{*} 1992 年列聖) が見せしめ裁判で辱められ、直ちに銃殺による処刑が行われた結果、総主教教会がもはや教会法上組織として存続することができないと考えたように想像されるのである。

しかし一時は反総主教派に賛意を表明したとはいえ、セルギーがロシアの総主教教会の正統性を全く否定していたわけではなかったことが指摘されなければならない。というのも、「生ける教会」運動に参加して間もなく『ニジエゴロドの大主教』で、革新教会の指導者であったエヴドキム (Апх. Евдоким Мелечекский, 1869-1935) に次のように書き送って、揺れ動く心のうちを伝えているからである。彼はいう。「私は改革を欲しますが、しかしわれらの聖なる教会の神聖な伝統との調和においてそれが成し遂げられるのを望んでいるのです」⁽²¹⁾と。果たせるかな一九二三年末にチャーホン総主教が釈放されると、セルギーは翻意し、チャーホンに和解を申し出た。その和解は次のように行われたという。

『ウラジーミルとシュイスクの府主教』セルギーは優れた神学者にして、教会法学者で、彼に従って数百人の主教や司祭が革新教会派となったが、いまは誦経台に立ち、その主教マント、主教帽、胸章、そして十字架を取り去った。彼はチャーホン総主教に低く頭を下げ、自らの降伏と罪を認め、興奮で震える声で告白を朗読した。彼は自ら床にひれ伏した。……総主教はゆっくりと彼の胸章と十字架を、白い主教帽を、彼のマントと杖を返す。その間

一部始終彼を厳しく、そして悲しげな表情で見守っていた総主教は、突然笑みを浮かべて、からかうように悔悟者のあごひげを掴み、彼の頭を揺さぶりながら、告げる。「汝も、老人よ、汝もまた私から去って行った」と。それから二人の老人は感情を抑えきれず、泣き出し、抱擁した。⁽²²⁾

その後彼は『ニジニノブゴロドの府主教』に叙任された。彼はそれ以降、総主教制に基づく教会行政の再構築に努力を傾注することになる。セルギーは、親ポリシェヴィキ派であれ、反ポリシェヴィキ派であれ、はたまた親総主教派であれ、反総主教派であれ、国内外に現れた数多くの分裂グループとは一線を画して総主教教会の正統性を擁護し、代表する聖職者となった。しかし他面でこの府主教は、世俗の権威との和解と融和を推進することに最も強い関心を抱く教会指導者でもあった。

註

- (13) 総主教セルギーの生涯については、Д. В. Поспеловский, *Русская Православная Церковь в XX веке* (Москва, 1995), с. 509. およびロシア正教会モスクワ総主教庁刊行の *Русская Православная Церковь 988~1988. Очерки истории 1917~1988 гг.*, выпуск второй (Москва, 1988), с. 41-56. 参考として Ann Shukman, "Metropolitan Sergei Stragorodsky: The Case of the Representative Individual", *Religion, State & Society* (Keston Institute, Oxford, 2006), Vol. 34 No. 1, pp. 51-61. を参照。
- (14) 大主教ニコライの日本における宣教活動については、牛丸康夫『明治文化とニコライ』、教文館、一九六九年、および中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』、岩波新書、一九九六年を参照。
- (15) セルギーは二度目の日本赴任時の一八九八年、北海道旅行を行い、その旅行記を一九〇九年公刊した。この旅行記は一九九八年ロシアで復刻され、翌一九九九年日本でも翻訳、出版された。Архимандрит Сергей, *По Японии: Записки Миссионера* (Москва, 1998), с. 229. 邦訳、セルギー著『ロシア人宣教師の「蝦夷旅行記」』、佐藤靖彦訳、新読書社、一九九九年、三四三

ページ。

- (16) この集会は、一九〇八年に設立された「宗教・哲学協会 (Религиозно-Философское Общество)」に受け継がれ、「道標 (Вехи) 運動」と呼ばれる知識人運動に結実した。拙著『ソヴィエト政治と宗教』、一六〇一七ページおよび三四ページを参照。「道標運動」については、ブルガコフ ストゥルーヴェ他著『道標 ロシア・インテリゲンツィヤ批判論集』、小西善次 訳、現代思潮社、一九七〇年を参照。
- (17) 司祭にして、電気工学の教授、美術史家で音楽学者のパーヴェル・フロレンスキーについては、拙著『ロシア正教の千年——聖と俗のはざままで』、日本放送出版協会、一九九三年、一六四〜一六七ページを参照。
- (18) A. A. Савич, “Краткая биография святейшего Патриарха Сергия”, Патриарх Сергий и его духовное наследство (Москва, Изд. Московской Патриархии, 1947), с. 26-27.
- (19) Ann Shukman, *op. cit.*, p. 54.
- (20) Сергей Дурсов, Время в судьбе (С. Петербург, 1999), с. 48.
- (21) J. Curtiss, *op. cit.*, p. 144.
- (22) Михаил Воскресенский, Патриарх Тихон (Москва, 1997), с. 274-275.

三 国家への「忠誠宣言」

一九二五年のチャーホン総主教の永眠を受けて事実上のロシア正教会首長の職務を担うこととなった府主教セルギーは、聖職者や信徒たちの間で必ずしも多くの支持を得ることができなかった。それは、セルギー府主教の首長への選任が余りにも異例の形で行われたためであった。

一九二五年初頭、健康を害した総主教チャーホンは総主教制の存続を懸念し、自らの死に備えるとともに、次回の地方公会の開催がいつ許可されるか不明であることを考慮して、三名の長老主教を臨時代理に指名した。何らかの理由で、

恐らくは最近のチーホン総主教に対する背信の故に、セルギーは三名のうちに含まれなかった。指名を受けた三名中、第一順位の『カザンの府主教』キリール（Митр. Кирилл Симрнов, 1863-1937、銃殺刑）と第二順位の『ヤロスラブリの府主教』アガファンゲル（Митр. Агафангел Преображенский, 1854-1928）はすでに流刑に処せられていた。第三順位の府主教ピョートルは、教会に対してソヴィエト当局が加えるであろう弾圧を予知して、府主教セルギーを自らの代行に指名した。同年三月チーホン総主教が死去し、ピョートル府主教が総主教代理として教会を監督した。しかし十二月、ピョートル府主教もまた逮捕された。セルギー府主教がその後の一八年間にわたって教会首長を務めることになるのは、こうした事情からであった。

当時のロシア正教会は組織として辛うじて命脈を保っているとはいえ、教会法上も、ソ連の国内法上でも不完全な地位しか認められていなかった。しかもセルギー自身ニジェゴロドにとどめ置かれていたし、多くの高位聖職者は逮捕されるか、流刑処分を課されており、彼らの間の意志疎通さえほとんど不可能であった。総主教代理セルギーが何よりも先ず第一に取り組むべき再優先課題は、教会の中央管理機構を整備するとともに、その合法性を獲得し、その結果正式の総主教を選任する地方公会を開催する権利を回復することであった。一九二六年の時点で合法的な教会組織として認められていたのは、「生ける教会」派といま一つの分派、グリゴリー派⁽²³⁾であった。

こうした極めて複雑で困難な状況において、総主教代理セルギーはロシア正教会の合法化を実現するために、ソヴィエト政府との交渉に乗り出した。その交渉相手は、当時一方で高位聖職者間の対立や分裂を煽りながら、他方で教会問題の監督を担当していた統合国家保安局（ОПТУ）秘密情報（宗教）部の第六部長であったエヴゲニー・トゥチコフ（Евгений Тучков, 1892-1939c）という人物であった。⁽²⁴⁾

工業都市イヴァノヴォ・ヴォズネセンスク出身の彼は、正規の教育を受けたことがなかったが、党活動を通して出世

のチャンスをつかんだ。トゥチコフはポリシェヴィキ体制が生み出した「鉄の信念を具えた新人」の一人で、教会を一掃し、「人民の阿片」の一切の痕跡を根絶するために、あらゆる手段と能力を躊躇うことなく用いる決意を固めていた。

この謎めいた若者に与えられたニックネームが修道院長を意味する「イグーメン (Mnyomh)」であった事実が最近明らかとなった。というのも、当時トゥチコフは信心深い母親とともに、まだ数人の修道女が残っていたディヴィエエヴォ女子修道院のモスクワ分院で生活していたからであった。トゥチコフのお蔭でこの分院は他の修道院分院よりも閉鎖されたり、破壊されたりすることもなく、長く残った。⁽²⁵⁾

一九二六年から一九二七年の初頭にかけて、総主教代理セルギー府主教とトゥチコフとのせめぎ合いは自然な成り行きで進行した。教養がありかつて優等に輝いた教会のプリンスは、年令も若く、教育もないごろつきと面と向かってやり合わなければならなかった。しかし実力もち、優位に立っていたのは、トゥチコフの方であった。セルギーは頻繁に拘留され——一説では四回、他の説では二回——、しかも修道女の姉や、当時一一七名にものぼった収監中の主教やその他の司祭たちの殺害を仄めかされて脅迫されたと伝えられている。⁽²⁶⁾

ロシア正教会が置かれたこうした状況にあっても、信者の数自体は増加し続けた。トゥチコフの治安機関は抑圧政策を強化し、とくに教会の経済的、財政的基盤を破壊することに全力を傾注した。他方で「生ける教会」——革新派教会が攻勢を強めていた。彼らはチーホン死去の間隙を突いて、総主教教会との再統合を実現して主導権を握ろうとしていたのであった。このように教会を取り巻く環境がますます厳しさを増す中で、逮捕されてからもソヴィエト政府と粘り強く交渉を続けていたセルギーは、一九二七年釈放された。

同年七月二九日、総主教代理セルギー府主教は当時の聖宗務会議を構成した七名の高位聖職者とともにソヴィエト政府との和解と融和を誓約する「忠誠宣言」⁽²⁷⁾に署名し、そのことによって無神論を奉じるソヴィエト国家との妥協を基本

的には認めなかったチャーホン総主教の路線を根本から変更した。いわゆる「セルギエフシチーナ（Сергиевщина）、セルギー体制」である。これ以降、ロシア正教会は教会内部にこの体制に与しない反対派を生み出したし、また在外ロシア正教会からの激しい批判にさらされることになったとはいえ、全体としてはソヴィエト政府に対して同調の、あるいは時に屈伏の姿勢を示すこととなる。

宣言は次のように述べた。

われわれ教会人が、ソヴィエト国家の敵たちとともにあるのでなく、また彼らの陰謀の手先とともにあるのでなく、わが人民、わが政府とともにあることを証明して見せることが……いまやわれわれにとって緊急の課題である。

われわれは……正教徒の宗教的要求にかくも配慮されたこと——臨時聖宗務會議を設置することについての許可——に対してソヴィエト政府に謝意を表明する。同時にわれわれは、われわれに与えられた信頼を濫用しないことを政府に約束する。

われわれは正教徒であることを望むと同時に、ソヴィエト国家が、その喜びと成功がわれわれの喜びと成功であり、その不幸がわれわれの不幸である、われわれの祖国であると表明する。われわれは正教徒であると同時に、「ただ怒りをのがれるためではなく、良心のためにも」ソヴィエト国民でなければならぬと考える。それは使徒がわれわれに教えていることである。（「ローマ人への手紙」第三章の五）

……多くの人がソヴィエト権力の成立は誤りであり、偶発的事件であり、そのようなものとして長くは続かないと考えている。人々は、キリスト教徒にとって偶然といったものは存在しないということ、そして起こりつつある

ことはどこにも、そしていつでも神の御手が働いていることを忘れていたのだ。⁽²⁸⁾

「忠誠宣言」に署名して後翌一九二八年になると、総主教代理セルギーはモスクワに移住することを許された。また喫緊の課題であった教会の中央管理機構を整備し、最高の意思決定機関である聖務会議を再開する許可をも獲得した。しかしながら、セルギー総主教代理がソヴィエト政権との和解を決断したことを後悔していたのは疑いのないところである。というのも、彼が「忠誠宣言」に署名、公表したのは、教会と聖職者に対する攻撃が一段と激しくなった時期であったし、その結果としてロシア正教会を取り巻く環境はそれほど改善されなかったからである。わずかに数人の主教の復権が許されたとはいえ、聖職者の逮捕は相変わらず続いていた。また一九二七年に神学大学が一時再開されたが、二年後には閉鎖された。ソヴィエト政府は、依然として総主教制の復活を許可しなかったし、教会の合法性も認めなかった。それどころか一九二九年には宗教団体を規制する悪名高い、いわゆる「一九二九年法」——「宗教団体に関する法律」——が発効⁽²⁹⁾し、教会は致命的な打撃をこうむることとなった。新たに一四四〇の教会が強制的に閉鎖され、さらに一九三二年には「無神論第一次五ヵ年計画」が始まり、日曜日に行われる礼拝に参加することを不可能にするために、現行の週間制に基づく労働日制度の改変も企てられるなど、教会攻撃は一層熾烈となった。こうしてロシア正教会は潰滅的な打撃を受け、宗教組織として存続することさえも困難な状況に追いやられたのである。⁽³⁰⁾

一九四一年の戦争勃発までに、ロシア正教会は二度の潰滅的な迫害の波——一九二九年と一九三五年と一九三八年——に遭遇した。当時収監されていない高位聖職者は四名に過ぎず、その中の一人がセルギー総主教代理であった。彼がこの時代をどのようにして生き延びたのか、彼の心中がいかなるものであったのかは想像するに難くない。一九三〇年彼は、生存していた主教をすべて逮捕するという脅しで強制されたとはいえ、ソ連には宗教迫害はまったく存在し

ないという屈辱的な公式声明を発表させ⁽³¹⁾ていた。しかしながら、その後間もなく「大祖国戦争」の勃発とともに、教会再生のチャンスが巡って来るのである。

註

- (23) 一九二五年末、『エカチェリノスラフの大主教』グリゴリー (Арх. Григорий Дукковский, 1866-1932) に率いられた六名の主教たちがモスクワのドンスコイ修道院において会議を開き、「臨時最高教会会議」を設置し、正式の公会が開かれるまで正教会の監督権を掌握すると宣言した。これに対してセルギー府主教はこの会議を否認し、解散を命じた。このグループはソヴィエト政府に忠誠を示したので、一九二六年一月、この組織に合法性が認められた。J. Curtiss, *op. cit.*, pp. 180-181. 参考 Акты Святейшего Тихона... там же, с. 432-435.
- (24) トッチコフとセルギー府主教に「つづは」 Д. Поспеловский, там же, с. 67, с. 126-128. 参考 Акты Святейшего Тихона... там же, с. 760-768. を参照。
- (25) С. Фирсов, там же, с. 201-202.
- (26) A. Shukman, *op. cit.*, p. 56.
- (27) 署名した高位聖職者は府主教セルギー以外に、『トゥヴェルの府主教』セラフイム (Митр. Серафим Александров, 1867-1938)、『ヴォログダの大主教』シリヴェストル (Арх. Сильвестр Братановский, 1871-1931)、『大主教アレクシー (シムーンスキー)』、『サマラの大主教』アナトリイ (Арх. Анастолій Грисюк, 1880-1938)、『ヴァトカの大主教』パーヴェル (Арх. Павел Борисовский, 1867-1938)、『銃殺刑』、『スヴォヨボロダの大主教』フィリッパ (Арх. Филипп Гумилевский)、『スウマの主教』コンスタンチン (Еп. Константин Дьяков) だった。Акты Святейшего Тихона... там же, с. 509-513.
- (28) Там же.
- (29) 一九二九年発効の「宗教団体に関する法律」とそれが及ぼした影響については、拙稿「ロシアにおける信教の自由——宗教法の改正をめぐって(一)」『産法学』、第三三卷 第一・二号(京都産業大学法学会、平成一一年一〇月)、九六〜一〇三ページを参照。

(30) スターリン時代の教会弾圧については、拙著『ロシア正教の千年』一五九～一八五ページを参照。

(31) “Интервью с главой Патриаршей Православной церкви в СССР Заместителем Патриаршего Местоблюстителя митрополитом Сергием, данное корреспондентам иностранной печати в Москве”, Акты Святейшего Патриарха..., с. 686-689, 30.4.78 Известия ЦИК. 1930г. февр. 19.

四 スターリンと府主教セルギー

一九四一年六月二二日、ナチス・ドイツ軍はバルバロッサ作戦を開始し、雪崩を打ってソ連領内に進撃した。ドイツ軍進入の第一報が総主教代理セルギー府主教の耳に達すると、彼はパニック状態に陥って沈黙していたスターリンにも先んじて、すべての正教会信徒に向けて祖国防衛を訴えるメッセージを発した。これは、国家と社会に関わる一切の出来事に教会が関与することを禁じた一九一八年と一九二九年の法律に違反する行為であったが、セルギーは果敢にその禁を破って、こう呼び掛けたのであった。「わが正教会は常にわが国民と運命をともししてきた。わが正教会は常にわが国民の試練を背負い、彼らの成功を育んできた。いまこの時に、わが正教会は国民を見捨てはしない。……キリストの教会は、わが祖国の神聖な国境を防衛するすべての正教徒を祝福する。主はわれわれに勝利を与えるであろう」と。⁽³²⁾

同年一〇月、セルギーは重ねて「キリスト教文明のために」、そして「良心と宗教の自由のために」ヒトラーとの「聖なる戦い」に参加するようにとのメッセージを発した。「各人が勇敢に警護の任に、見張りの任に立ち、力を合わせてわが祖国を、聖なる正教信仰をまもるだろう」と総主教代理は訴えた。⁽³³⁾さらに肅清を免れていた二人の府主教、『レニングラードの府主教』アレクシー (Митр. Алексей Шиманский, 1877~1970、後の総主教) と、『クルチツとカロメンスコエの府主教』ニコライ (Митр. Николай Мрушевич, 1891~1961) も戦争協力に積極的であった。セルギーは防衛基金を設立した。アレクシー府主教も多額の教会献金を集め、祖国防衛に貢献した。

総主教代理セルギー府主教監督下のロシア正教会のこうした姿勢は、ロシア・ナショナリズムとソヴィエト愛国主義の覚醒と高揚を促し、存亡の危機に遭遇したソヴィエト国家が立ち直って戦備を調える上で大きな貢献を果たしたといわなければならない。そして同時にそれは、ソヴィエト体制下でロシア正教会が占めるべき位置と果たすべき役割を確定するものであったといえよう。実際、ロシア正教会はこれ以後ロシア・ナショナリズムとソヴィエト愛国主義の鼓吹者としての使命に活路を見出し、ソヴィエト国家内に自らの地歩を固めていくのである。

一方スターリン政権はこうしたロシア正教会の戦争協力を高く評価したばかりか、これに報いることも忘れなかった。政府の教会に対する態度の変化の徴候は、戦争勃発時のセルギーの違反行為がまったく非難されず、それどころかセルギーの愛国主義的メッセージが印刷に付され、飛行機で前線に撒かれさえしたことであった。

さらに一九四二年夏、いま一つの出来事がスターリン政権の教会政策を大きく変化させるきっかけとなった。八月八日、ドイツ軍に占領されたバルト諸国の諸教会を管轄する主教として、総主教代理セルギーによってラトビアのリガに派遣されていた同名の府主教セルギー（Митр. Сергей Воскресенский, 1897~1944）は、バルト諸国在住の主教を招集し、主教会議を開催した。内務人民委員部（НКВД）の報告書によれば、この主教会議はヒトラーに歓迎の挨拶を送る一方、モスクワの総主教代理には忠誠を誓いながら、彼の「愛国主義的な反ファシスト・アピールを非難した」。これに対して、セルギー総主教代理と一四名から成るモスクワの主教会議が、バルト諸国の主教たちの行為を弾劾する特別声明を発しようと検討していた。内務人民委員部は政治的な利用価値を認めて、この特別声明を印刷して配布することを決定した。この報告書に内務人民委員代理の署名がなされていた事実を考慮すると、スターリン自身ではないとしても、政権中枢にあった内務人民委員ラブレンチー・ベリヤ（Лаврентий Берия, 1899~1953）がそれを知っていたことは確実である、とポスピエロフスキーは指摘する⁽⁴¹⁾。

ところでスターリンとセルギー総主教代理との会見は、一九四三年九月四日の一度ではなく、それ以前に二度、一九四一年七月と一九四三年九月に行われたという証言がある。しかし、この説を証拠立てる文書は存在しない。⁽³⁵⁾

確かなのは、一九四三年九月四日、スターリンがセルギー、アレクシー、そしてニコライの三人の府主教をクレムリンに招き、親しく会見したという事実である。ディミートリー・ポスピエロフスキーは、入手したこの会見に関するカルポフ報告書⁽³⁶⁾を基にその経緯、スターリンと教会首脳との会談の内容を明らかにしている。以下に、主としてポスピエロフスキーが紹介している文書に依拠してこの会見を検証する。九月四日スターリンは、一九四一年以来内務人民委員部で宗教問題を担当していたゲオルギー・カルポフ (Георгий Карпов, 1898-1967) をクンツェボオの別荘に呼びつけた。そこに側近のゲオルギー・マレンコフ (Георгий Мамонков, 1902-1988) とベリヤを同席させ、三人の府主教について、その年齢、健康状態、教会内での権威、ソヴィエト体制への態度などについてすべての情報を提供するように求めた。ロシア正教会とその他の正教会に関して一般的な質問を試みたのちに、スターリンは国家と教会との間に連絡機関を設けることについてカルポフに意見を求めた。カルポフは最高会議幹部会の下に宗教問題委員会を設置するように提案したが、スターリンは、連絡機関は独立した意思決定を行う権限をもつべきではなく、単に人民委員会（閣僚会議）に教会について報告を行い、同会議の決定を教会に伝える権限に限るべきだと反論した。教会指導者との会見についてベリヤとマレンコフの了解を得た後、スターリンはカルポフにセルギー府主教に電話をかけ、スターリンと会見するの都合のよい時期はいつか尋ねるよう命令した。府主教は「今日がよい」と応じ、二時間後には三人の府主教がクレムリンに連れて来られ、そこでスターリンとの会見は一時間五五分続いた。⁽³⁷⁾

カルポフの記録によれば、一人セルギー府主教だけが緊張しながら話したというこれまで流布している説とは違って、三人の府主教が積極的に会話に参加した。先ずスターリンが、教会の愛国主義的活動を賞賛し、前線兵からも後衛

兵からも夥しい手紙が送られ、国家との関係における教会の立場を支持していると述べた。そして教会はソヴェエト政府に何をしてもらいたいか、話すように府主教たちを促した。

府主教セルギーはこう答えた。最重要の問題は教会の管理・監督機構を正常化することである。過去一八年間、臨時代理で構成されていたし、一九三五年以降はシノド——宗務会議——さえ存在しない。セルギーは主教会議を開催し、総主教を選出する許可を求めた。他の二人の府主教もこれに同調した。スターリン次のように尋ねた。公会を開催するのにどの程度の時間が必要か、総主教の称号はどのようなものか、教会は国家から何か援助を必要としているか否か、と。セルギーがいった。総主教の称号は「モスクワおよび全ルーシ (Руса)」で、「全ロシア (Россия)」より適切だと思ふ。そして、教会が全主教をモスクワに連れてくるのに少なくとも一か月は必要である、と。スターリンは称号には同意したが、一か月は長くかかり過ぎると考えた。そこでカルポフに向かって「ボリシエヴィキ的方法を用いて」主教たちをどの程度速く集合させることができるかと尋ねた。カルポフは航空機を用意すれば三、四日だと答えた。こうして、新総主教を選出する主教会議の日程は四日後の九月八日と決定された。スターリンは国家の金銭的援助を申し出たが、セルギーは国家からのいかなる金銭的援助も断固として拒否した。⁽³⁸⁾

セルギー府主教の次の要求は、神学教育の再開に関連することであった。最優先の課題は初等の教区神学校を設置することである、と彼は指摘した。スターリンは、教育制度のあり方は教会内部の問題であると応じた。「政府は大学レベルの神学校と神学大学院を設置することに何ら反対しないだろう」と述べ、「教会は必要とする主教区に神学校を開設することができる」とつけ加えた。

セルギーはまた月刊の教会誌を刊行し、また「教会の再開問題について地方政府と交渉する法的権利を主教に与える」許可を求めた。他の府主教たちがこれに補足していった。活動している教会の分布密度は地域によって大きな差が

ある。何よりも先ず教会は、活動している教会と人口規模との間に際立った不均衡が存在するところで再開されるべきであると。スターリンは、政府は教会の開設にまったく妨害を加えないだろうと約束した。

次いで府主教アレクシーが何人かの主教を牢獄、収容所、そして国内流刑地から釈放するという問題を提起し、セルギーがこれにつけ加えて、教会がこれらの主教を必要とされる場所に派遣することができるように、釈放された聖職者の移動制限と居住制限を撤廃する必要があると述べた。第一の問題に対してスターリンは「われわれに名簿を提出し給え。われわれはそれを詳しく調査しよう」と述べ、第二の問題についてスターリンはカルポフに検討するよう指示した。

ポスピエロフスキーが指摘しているように、いま一つの悲劇的で、かつ興味深い事実は、セルギー府主教が釈放を求めて提出した二四名の主教リストと『クイブイシェフの府主教マヌイル』（Митр. Мануйл Лешевский, 1884-1963）が著した六巻の名簿⁽⁴⁰⁾とをつき合わせてみれば、セルギーが釈放を請願したかなりの数の主教が、すでに一九三六年から一九四一年までの間に内務人民委員部（НКВД）によって肅清されていたことである。しかし、そのことが当時の教会指導部に知られていなかったのは論を俟たない。実際、全リスト中釈放されたのは、ただ一人、主教ニコライ（En. Николай Морилевский, 1874-1955）だけ⁽⁴¹⁾、彼は一九四五年に『アルマアタの大主教（後に府主教）』に叙任され、スターリン死後まで生き延びた。

収監された主教の釈放問題を提起した後、府主教アレクシーが、レニングラード市当局の監督官が主教区がその収入の一部をモスクワの全国規模の教会管理機関の必要のために差し引いて上納することを許さないと不平をいい、そして新しい規則が、教区の主任司祭が他の問題と同様に予算配分の問題について発言する権利をもつために、教区の執行機関のメンバーとなることを許可するように求めた。これに対してスターリンはまったく反対しないと応じた。

府主教ニコライは、当時各教区でなされていた手作りで蠟燭を製造するやり方では蠟燭代が余りにも高価となるので、教会が経営する蠟燭製造企業を設立する許可を求めた。それに対してスターリンは、カルポフに対して教会基金を管理する完全な権利を主教に付与し、神学校、蠟燭工場、その他の企業を設立するのにいかなる障害も設けないと保証するように命じた。

スターリンはかつてのドイツ大使館の建物を総主教庁に引き渡し、そして再度いまずぐか、将来のいずれかの機会に教会に財政的援助を行いたい旨申し出た。府主教たちはこの申し出を断った。しかし、彼らは総主教庁に政府特別価格で食料を、そして総主教に直ちに、指導的な主教たちには将来乗用車を提供するというスターリンの申し出を躊躇うことなく受け入れた。最後に、三人の府主教全員が教会と聖職者の所得に課せられている耐えがたいほどの高い税金について不満を述べた。スターリンは個々人のケースはカルポフに委ねられ、彼が詳しく調査することになると答え、さらに今後すべての苦情が表明されるべき教会問題担当の国家机关はカルポフを議長とするロシア正教問題評議会（Совет по делам РПЦ）となるだろうと、つけ加えた。それからカルポフに向かっていった。「だが、君は宗務院総長（Общественный поп）ではないことを忘れるな。そして行動する際には、君は教会の独立性を最大限尊重しなければならない」と。⁽⁴²⁾それからスターリンはモロトフ（Владимир Моисеевич Молотов, 1890-1986）に会見記事をイズヴェスチヤ紙に掲載するように指示して、府主教たちを執務室の出口に導いた。⁽⁴³⁾

一九四三年九月四日に行われた会見の様子をカルポフ報告書に基づいて描写した後、ポスピエロフスキーは次のような疑問を呈している。「筆者も含めてこれまでほとんどの著者は、スターリンの府主教たちとの会見の主たる動機が、戦時において教会を自分の味方にしておく必要であり、国民の戦意を高揚する上での共産主義的スローガンの失敗を認める明白なサインであり、教会に対するアピールが戦争に勝利するために国民的愛国主義に訴える一つのやり方であっ

た考えるの常であった」と。しかし、もしそうであるなら、いくつかの疑問が生じるのを抑えることができない、とボスピエロフスキーはいう。「突如教会の助力を必要とするようになったのが、戦争の勝利者が誰であるかについてもはや疑問の余地がなくなったスターリンググラードとクルスクの勝利の後であったのは一体何故か？一九四一年にドイツ軍占領地域での教会の大規模再開が始まった時に直ちにスターリンが対抗措置を取って大規模再開で応じなかったのは何故か？」と。⁽⁴⁴⁾

今日公開され、利用が可能となった文書は、会見が緊急を要した真の、そして主たる動機がソ連国内ではなく、国境を越えた外国にあったことを示唆している。折しもこの時期、英国国教会代表团がロシア正教会を公式訪問する許可をソヴェエト政府に求めていた。英国国教会がこの訪問によって反宗教を公然と掲げる無神論国家におけるロシア正教会の立場を強化するとともに、ソ英友好関係に不安を感じていた英国国民を有めるという効果を期待していたことは疑いない。

一方スターリンはドイツとの戦いで「第二戦線」を展開するよう圧力をかけつつあった。その後間もなく開かれることになるスターリン・チャーチル・ローズヴェルトの三首脳によるテヘラン会談（一九四三年一月）に備えるために、復権しつつあるといわれる正教会の荘厳な礼拝を目の当たりにすることによってとりわけ強く印象づけられた英国国教会を通じて圧力を強めようと期待したのであった。結局スターリンの読みは正しかったことが判明する。モロトフが英国国教会代表团を招聘するのを一か月遅らせるべきだと進言したが、スターリンは取り合わなかった。英国国教会代表团が到着したのは、実に九月一二日に実現を見たセルギーの総主教叙任の一週間後のことであった。⁽⁴⁵⁾

このように、スターリンとセルギー府主教との会見によって成立した「政教和解」には秘められたスターリン特有の鋭い狙いがあったと、ボスピエロフスキーは指摘する。「和解」に誘われたロシア正教会は、そもその初めから、ス

ターリンによって何よりも先ずソ連の外交戦略を推進する役割を割り振られていたというのである。⁽⁴⁶⁾

註

- (32) Правила о религии в России, (Москва, Изд. Московской Патриархии, 1942), с. 76.
- (33) Русская Православная Церковь 1988~1988: *op. cit.*, Очерки истории 1917~1988гг., выпуск 2, (Москва, Изд. Московской Патриархии 1988), с. 51.
- (34) D. Rospielovsky, "The 'Best Years' ...", *op. cit.*, p. 140.
- (35) *Ibid.*
- (36) Государственный Архив Российской Федерации (ГАРФ), фонд 6991с, оп. 1а, делоп. лист1.
- (37) D. Rospielovsky, "The 'Best Years' ...", *op. cit.*, pp. 140~141.
- (38) *Ibid.*, p. 141. (39) *Ibid.*, p. 142.
- (40) Митр. Мануил, Русские православные иерархи периода с 1893 по 1965гг., (Erlangen: Oikonomia, 1984).
- (41) Акты Святейшего Патриарха..., там же, с. 875.
- (42) "Записка полковника...", там же, с. 262. Сターリンはここで帝政期の宗教大臣であった宗務院総長の表現を用いて、カルボフが宗教大臣でなうことを明言してゐる。
- (43) D. Rospielovsky, "The 'Best Years' ...", *op. cit.*, pp. 142~143.
- (44) *Ibid.*, p. 143. (45) *Ibid.* (46) *Ibid.*

むすびにかえて

スターリンはセルギー府主教ら教会首脳との会見において、革命以来一貫して取り続けた攻撃的な反宗教政策を撤回するとともに、とりわけロシア正教会に対して大幅な譲歩を行うことを約束した。これらの約束のほとんどは実際には果たされなかったとはいえ、教会がいくつかの成果を獲得したことも確かである。例えば、一九二五年以来エメリヤ

ン・ヤロスラフスキー（一八七八～一九四三）を長として反宗教闘争を指導してきた「戦闘的無神論者同盟（Соединившихся безбожников）」の解散と反宗教的定期刊行物の廃刊が決定されるとともに、「生ける教会」の解散とセルギー総主教代理を首長とするロシア正教会への統合、チーホン死後一八年間にわたって空位であったロシア正教会総主教制の復活、総主教庁機関誌『モスクワ総主教庁ジャーナル（Журнал Московской Патриархии）』の刊行、神学校と神学大学の再開などが認められた。スターリンとの会見から約束通りの四日後、総主教代理セルギーを正式に総主教に選出するために、一九人の主教がスターリン差し回しの飛行機で集められ、宗教会議が開催された。こうしてセルギー総主教が誕生し、総主教制が復活したのである。⁽⁴⁷⁾

しかしながら、スターリンの宗教的寛容政策が教会側に一方的に有利に働いたわけではないことは無論である。彼の融和政策が、ボスビエロフスキーも指摘するように、教会をソヴィエト国家の支配下に置き、国家の目的に、とくに外交政策のために利用するという意図の下で採用されたことは疑いない。スターリンは、会見では大袈裟に否定して見せながら、かつて臣民の心中を奥深く覗き込む「ツァーリの眼」として帝政を支えた宗教大臣、すなわち宗務院総長を想起させる「ロシア正教問題評議会議長（後の宗教問題評議会議長）」にカルポフを据え、彼の監督下に置くことによって、見事にロシア正教会を国家に奉仕する道具につくり変えることに成功したのであった。⁽⁴⁸⁾

セルギー総主教代理の側に立つて考えれば、一九四三年にスターリンとの間で成立した融和政策が、当時の全体主義体制の下でロシア正教会が生き残るためのぎりぎりの選択であったことは想像に難くない。実際、ソヴィエト国家との融和を実現することによって、すでに見たように、ロシア正教会は教会組織を守っただけでなく、教会法に基づく総主教制の維持を確かなものとすることができたからである。

しかしながら、支払った代償が決して安価なものではなかったことは紛れもない事実である。ロシア正教会は無神論

を標榜するソヴィエト体制に忠実な従僕として仕えることによってのみ、その存続と活動とを許される境遇に甘んじることになったからである。スターリンが設定した国家Ⅱ教会関係のこうした基本的枠組みは、ゴルバチョフ政権が登場し、ついにはソヴィエト体制が息絶えるまで、多少の曲折を経ながらも受け継がれたのであった。

総主教に選出されたセルギーの在任期間は、八か月という極めて短いものであった。晩年のセルギーに側近として仕えた掌院イオアン（Архимандрит Иоан Разумов）は、セルギーの日常生活について書き残している。毎朝五時に起床、日課の祈りを唱える。その後ヘブライ語、ギリシア語、そしてスラブ語の三か国語で聖書研究に従事する。それから執務室に入って、教会管理の仕事に取り組む。大祭など特別な日には早朝三時に目覚めるのが常であった。イオアンによれば、セルギーの振る舞い、穏やかで優しさを秘めた声、ユーモア、落着いた、そして物静かな態度、これらすべてがセルギーが日々過ごしていた深い精神的、霊的生活を物語っていたという⁽⁴⁹⁾。

セルギー総主教は一九四四年五月一日、モスクワで永眠した。彼が死の床にあってロシア正教会の現状と将来についてどのように考えていたか、真相はもとより不明である。

註

(47) 拙著『ロシア正教の千年』一七三―一七五ページ。

(48) 前掲書、一七四ページ。

(49) А.И.Разумов, "Христианский уклад домашней жизни святейшего Патриарха Сергия", Патриарх Сергий и его духовное наследиство (Москва, 1947), с. 232-233.